

海城紀行

完

伊東聯合艦司令長官演説

洋学文庫

文庫8

J233



石黒軍医総監

海城紀行



四月二十五日晴此日午時堂に海城行の余を
受け寺内陸軍少将野田監督長城破兵在
り共上犯故を搭して四時半旅順口に参り野
田氏属を以て野山書記並に國民新聞の徳一
猪一郎深井英吾の西氏亦同行し海上風

舟浪夜白けれ幸と船病を奏せて甲板に
出で右舷に旅順半島の山々處に砲臺を
夕陽海に没すも及んで船室に入る

四月二十六日早雲六町船室を以て船中
ハ右舷に遠く山々を望み海面水濁り赭色
を呈す遠河に口近きを知らず舟中遠鏡
を以て遠く甲の河口の砲臺を認む然れ
ハ船あり停り、赤旗を掲ぐ是水支隊内
昔の居る船に我船停りて信号はハ忽ち
一人の舟を以て来る異し、水支隊内者之英人

と云乃我船に三乗りあり、前進す漸く河
口に至り水急と濁り九十箇口の市街に及右
ハ河口の渺々たる河内ハ帝國軍艦愛宕
鳥海の二艦並に英國軍艦パロウルと我
運送船三艘あり安治川丸頃日軍艦に
觸れて傾倒し、是より前方半水中に没
して河内を倒し、是より又ハ既にして橋樑朽
み是を機橋ハ木造に水に三千噸の船を
着るを得へく其處に大破すものハ戦故
夫邦人其木材を毀ち、是より又中すものあり

北尾主事也直事兵站司令官工兵少佐渡邊
教大守備隊司令官步兵少佐渡邊一
等軍医西原勲等来りて其の上陸兵站
司令部より此地に勤る軍医諸氏と面談
去年六月以来後軍一処に歴戦しつる者も
困苦の語愉快の談交り生れり三宮理事
官より訪ふ三宮氏及三橋書記官と幸居
為地々尺一英高の屋敷より海城へ推し送ら
へり西洋菓子而三種を贈ふ地高屋敷へ
本邦の紙幣中より受頓便利之復兵站部

より中食の食後本下一等軍医西原一等軍医
指導して病院より病院へ舊旅店を応用
せり又三ヶ所之病者多かり昨日を以て派遣
隊より死者二十一人僅に八十四名凍傷者多
室杖野之次より重傷者六名あり而して人支
殊に多し其取扱より此地所々於て人支
去へり軽症の者も八聖診し重症の者も八一
診察して司令部へ歸り野田繁徳富影山
余ら海城へ向ふ寺内氏ハ蓋平と向て谷津
邊守備隊長ハ騎兵一騎を附して指導し

渡船して供て野田棧余三人八人力車徳昌
氣山深井の三人ハ一馬車ト荷物ヲ駕リ其子
余トて進む營口ハ旅順ヲ距ル百海里奈河
の河口より此所奈河の廣さ凡五百メートル
満洲の時ハ二千噸の船ヲ入ルコト容易ニ支那
ハ幅濶檣林の如ク但河口の一所河底淺ク
満洲の時ハ非ハ大船ヲ通セざる処ニ故ト大
船ヲ入ル必湖ヲ入ル地而河又我越後の新
浮ト恰モ似ル市街ハ戸數凡二千人口ハ二萬五千
ト稱スル也毎年五六月の頃ハ倍して五萬

二萬ト云々云道路の汚穢多シ泥濘四道ト
溢ル而降ラズハ尚軟ク浸ル及ヤ雨トヤ
我軍ヲ領セシ以來守備隊長大士土地清潔
ト心を利心督責ヲ嚴メテ亦如斯ク云
家屋ハ大なる多あり中等以上ハ煉瓦又ハ石造ト
ト下等のものハ土造ト云々支那地方ト異ル也
破産ハ河口ニ市目トありてんツノ巨砲ヲ備ヘ
又處々兵營あり
市内食物ト他貨物ヲ強奪ク者多ク一ツ成リ
雜當モ居ル地ハ美國領事館あり又數戸

の英商ありて支那町のやくは穢ならず事外
國人地外住まりあ五十人許りなれ近日戦乱
の爲に兵を避け此に来り集り多き人々
二百餘人居り云外人頼り我兵の威律あり
を信し彼我の尙親しきを又し

富豪の家ハ屋上アベラの仮屋を設け人を
此に居らしめ終夜小銃を奏して敬言戒め蓋し
清兵の逃亡し者又盗賊群を起して来り
強盜あるをあるを防ぐこと

此地遼河の咽喉にして奉天省地方の産物其の重

もあはまハ穀類休大豆其表品ハ此地より
外にみつ故に高貴なりて税利大なる如し
云守備隊長の言に近日専ら市政を理し
營口を四邑に分ち区長を命り市内区務を
理せしめ又評議員を選りて市政を調り世
し市内清潔衛生工事をも専ら此面を
なすて端緒を執りしむれば本必叙るべき
の大貿易場とふるらる此前途に有る港
々占領も此行の快と稱す其一也
昨日旅順を奏する時馬を好し搭して伴

父とせし宮口を帰る一人曰宮口馬を
陸揚せし因茲之幸上昨日市部人力
車數十輛車夫共上到試之を用ひん
く乃馬を伴えりて人力車を伴ふ所宮口
十是もや馬の陸揚左程難くも先づ此品
豫計す速ふ其上陸して午後二時發程を
や宮口市内より既浪深く郭門をぬり川
沿うて行くや浪深く踏薄きして車も
多多く其乾きし所ハ西四以て車を渡す
へく其乾きし所ハ浪深くして車軸を没す

因て益馬を伴はざるを後悔も余輩淺智
しし事を豫計して却て敗る取らば
此嗚呼

宮口をぬり中右方より遠く連山を見れば前
後四方より渺々たる一物の眼を遠くまはる
村の低柳と連河の溜りたる而已
其平地極目眺望す一物の萌芽を生
ずるまはる道路ハ大且長く通るれば浪深き
為り人々を運らば勝手自由と吹散の中を運
行し五馬七馬を駕せし車輛を一乃至二の支那

人御して荷物を運送すも亦道を政敷くして二道に
依らざるに稀に政敷く耕すも久しき亦二頭以上の
牛馬を引く一畝の大き十反以上三三十反を耕す
牛馬耕すありきもの於ても亦然り耕地の面
歐洲の耕地に異ならざる所謂大農なるもの其
畜牝を檢するも粟黍芋多し亦豆を食す一日
稻田又ハ徳陸を足す

其土地の細目にして粘所謂泥土にして頗膏
彼をわたり蓋雪降るハ梅雨の候河溢れ水記
善く沢を及ぼす此地味を言潤するも久し一

里乃至一里半まで点々村々あり村ありハ必
柳あり而して村家柳をきまき多けんや墳墓必
柳をきまきあり故に村ありハ必墳墓あり墳墓
ありハ柳あり其大戸を以てハ居家數十株の柳
を家の周囲に種多あり土塀柳^揚坐らる
五柳先生を思ひ起さる樹としてハ柳の他あり
ま少しの墓地も松を種する久し古来松を佳
吉寺強の表飾とも今此地に来り松を食す事
墓門に於ても果して其何の故なるを知らず
行く路險にして車を下りて數十次數村を

徑ハ午後六時高利ノ陣中ニ高利一ノ高坎ノ書
ヲ嘗テ宋慶ノ陣中ニ於テ我軍一軍ノ司令
部ノ事ヲ一ノ此地管口ノ距リ四里(坎里程)
海城牛莊管口ノ通ルニ要路ニ高利ノ達
チヨヤ歩兵中佐馮升元大尉出テ近ヲ導ク以テ
又至ト云フ富家ノ一室ニ中佐曰小官元此地塔
兵站司令官トシ今度彼ヲ轉テ新兵站司令
官徳田歩兵少佐昨日來ルニ未ク事務ト就
クモ故ト接テト詰ルニ春新ノ事ト及テ暫ク
ト宿舎ト尊ルニ宿舎ハ門ト同春堂ノ類ヲ掲

ク主人出テ迎テ年六十許姓胡名九林号松亭
曰湖北ノ産ナリ年二十一此地ニ來リ藥ヲ賣
診ヲ施シ今日ニ至リ家族二十五人東鄰本城
家ニト巧言善ク思ヒ詰中云(予)ハ宋慶
此地ト五日駐軍一馬五民亦在リ又曰和近
日ト至リハ和成六我軍業ト御本城也
近キニ至リ(予)ト兵站部トシ之食ヲ分配
テ司令官特ニ注意シテ救糧ノ有無ヲ
附テ送ラシ禁少依嘗テ久ク支那ト云フ地
地亦嘗テ經過スルニ其土人ト接キト云

一十氏に依りて執譯を得り

室の酒造あるは支那に於て言を待も此に是
もや余便も僅に中庭に於て四方を採りて家
族皆戸外に坐して人々甚固却も主翁を意
を悟り中庭を指して曰此所は此所と然れども
此に上りて急ぎて戸内に入り各家皆厨子
皆中庭に於ては暫くも此の飯大来り食ふ事
便に云へり

此に着てはや人々を以て火を起さし湯を沸
さし水白く濁りて飲用あり沸して茶碗に注ぎ

静まるとして十二三分して破底に細浪を沈澱
し炉火も亦燃へ尽く更し兵站部の人を以て
之を求め又一掬の炭を得て炉に加ふ新炭共
本邦より送致するもの本邦人の語に曰日か
へ行くと照る大水に不自由せぬと云事あり是日
の照らさるる火と水とを以て所あるを謂ふ
然れども支那の地は清水多きは事ありて火の如
きの燃料なきも亦其事は此地の人水を得て求
むれば濁りて汲みゆく井に水は白濁も清か
らも蒸らさずしてハ村内に凹處を設け雨

水を瀝へ水面をくろして且泡をちりちりを水面
の青垢に泥をくろして除去して水を汲以て
飲食の用に供するも戸々皆是之又燃料の
ゆきハ木の皮又ハ黍粟の根を土をこぼして以て
燃料と供し煖炊の燃料と供す甘藷皮等ハ
掘て稀之乃水も火も乏き処と云へ水
火乏き所を尋ねてハ布邦人の言葉も聞き
知之遠征軍の苦想いざしつ此夜守備隊
附依ハ木三等軍医来りて隊の健康佳良
ありて報告又土人の事を語つて去り

四月廿七日晴早起行を整へ飯を喫し食條
の茶を水筒と貯へ行程も泥途益困難幾度
と車を下り空車を換へ後ハ一人の車夫
一空車を換へ後ハ高敷下後れて来り其
難路想ふ一十時半缸瓦塞し達し兵站
部十五分司令官徳田歩兵少佐と達し又守
備隊附依森三等軍医と達し語り兵站部
ハ幕高の家より一節瓦三四丁緩らば煉
瓦の多歴を以て一宗屋敷棟頼り宏壯あり
主人兵を避けて上海の支屋よりと云缸瓦

寨を八土人の大感王寨と稱して缸尾寨と云ふ
戸數三百許一丈村に此兵站司令部あり中食を
塩麩と稱す運送するも粟も塩麩を送るも
朝鮮横津迄の私貨を除き横津より陸上
にて義州より龍王廟迄来りて時精算も多し二
十尾入一個を一里二十錢つよて運送せしむる時
一尾の價は四五十錢と云ふ夫より海城を往て
此所より八一尾丸四回許一切此の塩麩價は十
錢より之食後野田氏特に兵站部へ囑りて
人夫を乞ふ毎車一人つゝ車夫の力を添へむ

十町半缸尾寨を發し海城に向ふ右方並に
前方にあり遠山嶺に近し道路は途に比も
此の大山善く加らざる人夫の車夫の力を添へ
あり車を下らせりて行を停し行くに里許
一村に憩ふ車夫袒き憩ふ而彼の點朱青紫
然道の上は那人群して之を人より一人あり其皮
を撮みて試み剥きんとし蓋し點と知らず或は
紋線ある皮を用ひて袂を覆やるとして疑はる
之因て此地にも亦點をもちあはるるに問ふに答へ
て曰繞てあり故に點を知らずと因て惟ふ九紋

龍史進花和尙魯知深等を懸きし俗地
方ありきして依邦土を或る書曰文身ハ
東土の俗也或ハ然らん

村家の法墳干上等のまの石又ハ焼瓦トして石置
若ハ焼瓦の塀を築り中其の以下のちハ泥土の壁
屋上土塀を築り道路も屋敷を一段高
築りて常とて是亦一ハ洪水の時水はけき
戸二木材を敷き戸三盗に備へ戸四烈寒を
防ぐ又毎村一個大なる石臼を備へ蓋秋を收
獲の際穀を精り粉を挽く事ありと云全村

共有の物と教段の野馬を用ひて換くと云因て
惟ハ我國にも粉挽き又ハ板板き事毎村大
なる石臼を二三個備へ共用し之ハ大なる
且完全の蒸棧を備へ得又大なる力を省く
を得るらん又村々見ると少ハ日雇様
の者多ハ自家各個の家々炊爨もして各
飯屋を建てて食を賣り晝食ハ道傍の食
物店より来て食を賣り常とて又所謂間食
て後を乞ふハ特々飯を食ふてもある
之村蒸の家門前戶外ハ味噌酒のかはり

ちるもの一尺斗りの赤金中を付けさるる
吊りさるるは何れも食物を商に招標
こゝに其食物ハ多くハローピン 鱈^{カマクラ} 黍^{アヲ} パン 粟
パン等ハ此地方の人頼り上昔の人ハあつたハ米
を食ハさるる

缸尾寨を棄て行く二里許有る山漸
く近く近づき甲乙ハ一ト岩山上下破界を備や
るあり是我軍ハ海城の守備を設くるハ此岩山を
左に尺て行くハ町許數騎進来りあり近づき人ハ
菊池軍迄監以下同僚諸氏来迎あり之を往て村

不破兵中依亦馬を破て来り共々奮て話り導
りて海城の門外より一小流を流りて城門に
達す門外ハ北東の一寺觀あり樓ハ殿堂觀
然として後年畫棟彫梁祭然として秀つ閑
帝を祀る殿宇ハ一臺額して白山會堂と云
閑帝を祀ると共々山西の富直家城に會て商
事農業寺の事々商詢あり所へは更結構
東京の銀行集會所ハ知きものありき也ハヤ
商工會議所ハ比るらんヤ
城門をへて海城市と云く戸五師團の兵集

く群をくち去去年十月九連城に於て戸五
師團の諸兵をくち去兵以来道途險惡連夜
宿道を遠くして糧を乏しく各兵の顔色蒼々
して血をくち類削れ肉瘦せざる者あり其別を臨み
て心より爲るく時正に凍寒より向て其身体より其劇
寒より堪へ得るや否やと而して今来て其兵をくち
て皆類豊より色赭く臂太く脊骨中去年の兵と同
一の者と思れ其身体艱苦より慣れ遠征より熟
食足り氣満ち天下に横行して欲する者なきの
勇をくち其行の取て快く稱する其二也去

戸五師團長奥中將を訪問し次々直ちに病院
に入りて其子歩兵大佐依藤正を訪ふ依藤
大日孫に銃創を受け爾後経る良ならず遂に
俵より切斷し今病床より衰弱甚しく一時頓
危険ありて以て余海へ之を安んず此に是もや
直ちに此に到れしは病室に入り面を會するや感
慨滿胸互に眼を涙を浮へ言語を以て所謂會
涙眼見會涙眼のみ余久しく依藤を知り其平
素に勇剛な回の役元帥より以来の艱苦の
方面に於て勇戦十数回世人依藤技隊を以て

最強の隊とも去年兵庫縣にて別々廿餘勇
凍死夜叉をも挫くへき勢ありし重創を負ひ
久しく臥し起すも全身疲れて肉なきかく氣
息逼る言語も亦法に近きこゝろ握り仔細に
診察し五十長て活初て祭も菜池軍医此今村
病院長等と綱帯を役し創処ヲ扱も之創面
良好且近日ハ熱去り食進み精神亦漸く復を
今日又之処を以てまハ最早性命ヲ差支ふきを
先遣此之処行の快を稱す其三也徐に之語り
推り来り此の葛粉白糖中乳赤酒等ヲ贈り相

朝を期して別々他の病室にあり重症病者を診
し薄暮病院をみて兵站監部より兵八八奥師
團長大嶋旅團長(義昌)城下監督村本兵站
監より始り數十名の將校来り候つ共し食卓に就
きて御食も受く此所ハ豪商の家屋なりて大節
の内は大度十餘棟を連続し頓宏壯之其食糧
のきみ牛のきつお雞のうらみ鯉汁ライスカレー等ハ
して酒亦和洋あり村本氏曰近日本邦人来て洋食
店を開く十五人此ハ岩城亦整ふし今此に未だ
食食ありハハ真に注意なり尚此に一事發馬く

へき八余、旅順を去るや旅順の飲食物不足
きり推想し且去年九連城安東縣苦まで
遺囑せし不自由を思ひ依孫の病を慰まらるる為
親の葛粉白糖を推し來り先刻之を贈り
し程ちよと此の食後村木氏ハ特に一皿を持來
りて曰君と野田君と共に酒を嗜む甘きを好む
殊更ハ蜜せしむハ此品として蒸羊羹更ハ加丸
てら巻くを賜ふは是人文中ハ菓子職ありて近日
專ら菓子を生業せしを以て之於是余先刻依
孫に贈るも不十分歎く遠家の懐は堪へず

食後談話抜刻十一冊とて散り兵站司令
部の客舎に入て眠る此舎亦此一郭の内より
此夜旅順川上中將より電信あり急用あり
廿九日迄は帰らざらん

海城の地東南山を遠くんとし西北は茫々として沃野
千里大低山を尽く処一も眼を疲るまろく市を従ら
ず石壁を以て四方に樓門を建て外に連なる石壁
の高凡三丈餘其厚さ三間餘其壁と数人袖を連
ねて散歩す一全市戸数凡二千餘人口一萬餘(医
師四十名藥舖四坊四舖皆大屋也)現時我病院に

使用せし家屋百餘棟凡三四町に達し戦中大なる
寺院あり本堂十八巨大の木像數個を安置し又
明神代の碑數基を樹つ數日攻め入り必入す
まの多かりしをもちや即時退却の電信を接し
しを以て之を掃蕩す時あり去月中茲に秋病兵
千二百餘人を運きしも皆航送し尽し今在る者
僅に百名に上らず

四月廿八日雨又風昨夜驟雨到り今朝霽し
路泥濘之早起飯を喫き汗流漬り梅干

昨夜の盛饗は持し山海の珍を備へ食す

も今朝の朝食は戦地通常上下一般の兵餉

に食後菜汁軍医部長も其後病院に到り

昨日は残り多病者多く一兵卒大徳に銃創

を受て骨折し多く病床にあり者二更枕頭を

とりや菜汁白石黒湯生長官閣下急ぎ旅順に

帰らし命ありし少時忠告等の病を診せんとせ

るに僅し診を受くべしと其兵卒長を頭を上げて

曰わぬ隊長殿を八段に診察しむいやくと因て

其隊長長ハ誰かやく問ひしに佐藤大佐と

答ふ依り昨夜已に診察し其病況良よしとや

性余も急念なきを告ぐ卒長に謝次其自
身の傷所を以て尺せしむ抑代蒸り人と為る殿
正其部下を平す可直候借せしむ其内
傷甚敷きも慈あり此兵卒去年の徳目取
初より依蒸り艱苦を共す共し銃剣を受け
其兵士相思の情深く此を以て余直来情は後
く今又此卒に對し、市中を湿き各重症患者を
於家へ更し敵兵負傷者を入れり病院へ入り
其重症者を診り、奥師團長大嶋旅團長
竹田民政殿長村上兵站此等と別を告げ客舎
に歸り飯を食ひ度ありて此地兵陣の傷生部
同僚諸兵に別辭を告て曰

同僚諸兵よ余も兩三日此に淹れし様定あり
を以て未だ諸兵に親しく懇話もすし至らざる
に急ぎ歸りしき電達を受け早に帰程の上
史古言し曰珍寶財を以て購ふべく名譽ハ艱
苦を以て得しと世上征伐の役を諒する者曰そ
聞け史古に五師團を稱し、故なきに非し
諸兵よく此声譽なきに五師團に兵艱苦
他の師團と之れをくらさし、其に名譽も亦他の同

一から既と噴く半杯せらるゝ名譽を有るは金
 も然れや我情生部の大敵の如く横つる巨匠大
 軍にあらざりて將士近人ともる其期は傳流病
 子より諸氏幸よ自愛其才を健子て此大敵を
 是らんこしく禱す

此らして握手して別小並池軍医監の馬を傳し
 之し騎して城門をぬつ大嶋少將並池軍医監
 を首として諸氏騎して内外を送りて別小川を
 渉り騎兵を失と一野田氏と共に壘を連ね前
 途をたよりて行くが風雨来る道路泥濘昨日

の代にあらざりぬ尾寨兵站部より徳田司令官
 十連の午後夜を喫り徳田の詰り曰先日未近村
 強盗御廻り来て救ふに者あり其強盗不
 る者八二十乃至三十人黨を結ひ銃刀を推し
 て富家を破るゝ或は主人を縛り鉄を紅熾し
 し骨を貼り又の筆をせしめて下り火を焚き
 以て金銭の所有者を白ししり而して此盗を為さ
 者或は累世盗て業とし若くは一村落を業と
 して世人を知らず許さるゝ及て彼等と慘害を
 加はらるゝを以て訴ふ者予と頃日訴へ来る者

亦秘窓子て且捕ハ必殺して帰ラマサレテを
頼不困守備兵を以て之を捕ハカ民政廳
ヲ送ルコト

十一時半紅尾寒ヲ祭キ凡兩尚廿一則深泥を
踏テ午後五時前高利ヲ達キ客舎の前已ニ兵
站部より兵卒を以て迎ヘ一兵站司令官
侯ニ本步兵少佐来リ接シ寺内少将より急電
を傳テ曰明廿九日午前十時口ヲ達セラレト舍
主胡九林其子と共に來リ接キ自ら筆を取リ
家内外を掃テ頗る中邦清潔の風を解キ

トモクサレ六時半茶ヲ佐門子入り来リ茶氏
今朝破産を以祝シ後以て海城を祭リ今追
及一之海城より騎兵一を伴ひ到リ其宿を
夜半風雨甚シ

四月廿九日少雨午後歌早起装を替ヘ雨を衝
テ奈キ馬蹄乾シ滑リサシ躓ク一昨行ク時凸凹
山石の如キ道路今日歸リ降リ泥波深キ
尺餘五馬を駕サシの馬車一界ハ降其道を
往来モ晝日八連城ヲ於テ支那馬車ニ尺餘
以為ウ、其車輪の厚クテ重キ甚重大ト云

くも費不無瓜陰坂坂路を上下する或ハ之
を要するも思ふ今日此坂路を往來するを尺
て平地亦此車をあらさハ行く能ハざるを知る
所謂百兩一具ハ若くは二御者此車を御する
ハ之を唯馬のみならず馬野驛牛等々文せ
絆キ又路遠ハハ前十五馬を駕後ろ二馬
を牽かして隨ハカ駕馬疲勞も及て後馬
を交代セハ又本邦の荷車を用人を尺ハセ
薄弱キハ此難路に堪ハざる而て各兵站司
令部にて間々宮口より海城十五間又蓋平
十五間各兵站部の間距離凡四里より各兵
站部に於て毎日此馬車百五十輛を徵用
得るハ此難路患者を送る大擔架の外
國に於てあるハ昨日も来りし村を經て九
時宮口市門に幸り市内道浪濤九時半兵站
司令部に五小寺内少將以下皆兵寺内氏ハ
一昨蓋平に到り桂中將以下亦三師團の將校
十達ハ昨此に歸ると云木下西原桑原南の
諸軍医十達て職事を示し更ハ英人の設立
あり宮口赤十字病院十五人ハ世に紀後

丸の谷松崎より迫り行くことを得ず三時後九
時上り翌三十日朝旅順より帰る (元)

前所派司令長官 演説 於吾軍前師範堂
校土井十郎

昨夕生徒取次諸君一同の歓迎を蒙り
本戦の光栄とも思ふて謙一身の面目に
依りて交す諸君の厚情を謝す故に分教
頭及び祐吉、軍事経歴上生徒諸君
の饗戒を多き法話の不便ありて以て聊我
の経歴の一端を述べて諸君の参考に付せし抑日清

の決戦破るに西國將士鋒火相見え人とも
風雲甚急と軍事の致す戒一日も緩み
不肖祐吉、昨夕の事にて蒙る大文師陛下
軍機二十八隻運送船三十八隻都合五十二隻の
指揮を司るべき旨所委任を拝受し西海艦隊
若備艦隊を併せて聯合艦隊を組織し
南東九州釜山仁川等々、西羅、度萬師團上
師命令ありや五師團大嶋混成旅團を擁して
仁川上陸せしむる後未だ幾許あるまじき清
國艦隊の一部度て度西濟遠及軍送船

高陞子の陸兵を擁護搭載して来るを偵知
浪速吉野秋津洲の三艘を以て豊嶋沖に
逆撃せしむる時、尾山を以て五千の兵を
弟の清兵も亦我陸軍の勢を破るる處にあり
詳細は新聞紙よみて知らせらるると思ふ
此降清国若人より八平塚より陸兵を以て海上
と我呼應せしむる而して直ちに仁川を衝き更に陸
兵を近海に上陸せしむるの計を公衆を知らしむ
と信じて九八船を以て我艦隊を以て仁川を封鎖し
或は偵察船を近海に以て彼を偵察ししむる彼

来るを以て遂に進んで威海衛を攻撃せしむ
此第一艦の港内を以てよく却て砲臺より巨砲
の乱発を受ず、新時意我の少一町に上りて其行
進に彼の根拠を揮ひ得ず、其時我軍平塚攻
撃の壯舉あり、此地要害最も堅固にして水陸
合撃を以て非ハハ全隊必す一を以て乃仁
川封鎖を解き、祐亨又艦隊を率ひて大同
江に會漢陰洞を根拠として我艦を江上に
進め、外に敵艦を振まふの計を知らし居りし
偶余あり艦隊を率ひて陸兵護送の任あり

薩長山嶽大將五師團の運送船を伴ひて海
上三幸仁川を志し船名命て六十二隻黒烟港
内を備其壯るる人目を驚かせし任終るる舟
漁漁洞附近を運了未幾許ふらきて失祭
より福嶋中佐より敵軍大孤山沖にありて登戒
を嚴しせしむ叛を得しり蓋敵軍其地附近
に上陸せしむる後敵艦八隻附近に沈没し
居るらへし奉り其港の準備を教へる昔備海
西艦隊の殆ど全部を他より二遊撃艦隊の赤
旗及び西京丸を率ひて偵察攻撃せしむる針
路を法して直ちに北に向て其役赤城の如き小艦を
伴ひて八海海河口に侵入せしむる便を計しし果
せり或大孤山沖に敵艦を尽して来るる會も
廿九月十二日午後二時より激戦數時を涉りし
幸に陛下の御威徳と將校士卒の忠勇とを
以て支く全提し獲りし其状況の如きは秘を
要せざる限り新聞社員に傳へ祐言し又大本營に
報告し其きん人の定かりし知せられ居るるを
此日陸軍より大に敵を敗り平壤を陥れし
是より我艦隊の漸く支那海を駛り戦海

旅順遼東湾を封鎖せしむるに日るに地味陸
又旅順口攻め隊を二軍上陸掩護の命
を受け大山大将以下運送船五十隻を花園口
に投錨せしむるに地味我艦隊敵地へ近きまで
敵艦の襲撃を恐るるに五り卒に幸あり
陸兵の大連湾旅順口の鐵壁を陥るや我艦
隊も海上進出を應援しむるに敵の要港旅順に
我軍は着つ餘りなく威海衛のみ則ち其守
備を偵察せしめ陸兵一萬五千海兵敵艦
艦を死守せしむるに詳しむるに日るに地味

攻撃の計を定む初め日るに地味海上若
くは陸上單獨の運動を以てせしむるに日るに地味
あきを以て海陸合撃敵を以て相応せしむるに日るに地味
ららめ初め其崖を抜へて城を破りて遠算を
きき期するを得しむるに地味二軍大山大将亦之と同
し乃ち佐官と共に其を大本營に敵に容れしむる
依りしむるに地味二軍の一部を刺し榮城に上陸せしむる
一月廿一日を以て大軍合撃陸上の威海衛は不
日して全く陥落ししむるに海上の威海衛は日るに地味
劉公嶋を控へ敵艦を以て集り防材亦最

定めて地を利するに容易し隘を可くするに乃ち
行く事業の後漸くして防材を破壊し僅し五
十ノートの道路を閉じ其の地雷を進め夜回
談撃を識みしりし豫期せりも好果を奏し
るに其翌更に收隊を進め偉大な効を奏し
りしに祐言の最も満足せし處に諸君は至
むとこそ此戦終の結果として我國の非善を
其位置を高かりしと同時に非常の強敵を四
方を受しし南後我國の振張もして後て敵を
受しし冬強大夥多なるハ熱の免れざるに其
らハ苟も我國の位置を下しし欲せずとも若くハ
進て是れ其栄を發揮せんと欲する真心の大
日本國民の志事と彼強國と頭頭衝突する
の大覺悟大決心を俾、徹底し為の平野に
てハ各其業に奮り奮勵切實以て国力士氣を
培ひ緩急に際して同率果確もしくわき有
へしし諸君ハ己の政治の長所と我國の粹とを
併せて教言せし者も此の學術上は於てハ今後
我が彼と劣るなきを信じて可なりとも此れを
此を以て能事とせししとるも勿れ抑學養を

卓哉、人々も恰も其心を器具の如く破
とて國家の振張、冬ふき支あり、美生氣躍
と活用、靈動の妙、唯一の精神、基くのみ、今
回の戦争や、定、明、此理を指し、(遺、(五)
語、曰、精神一到、何事不成、と、向、向、嗚呼
昔、之、き、此、精神、に、祐、言、親、から、戦、場、を、煙
撥、も、子、我、士、卒、の、戦、火、さ、も、の、皆、敵、向、向
て、伏、せ、り、敵、兵、の、皆、我、に、背、て、我、に、居、り、是
我、士、卒、の、忠、勇、奮、闘、の、意、氣、乎、壯、る、も、彼
清、兵、の、後、に、強、剛、を、受、け、て、亦、怯、懦、を、初、り、
闘、志、あり、所謂、偶、人、と、異、る、多、き、を、知、り、口、に、
信、教、の、因、何、必、も、遠、き、も、亦、わ、る、を、要、せ、ん、や、水
雷、砲、攻、撃、の、如、き、は、其、最、も、烈、乎、勇、に、諸、君、云
勿、れ、精、神、の、發、奮、に、用、あ、る、力、又、と、美、事、業、皆
外、へ、向、ま、今、日、我、國、民、こ、し、此、大、精、神、を、き、の
徒、に、向、ま、國、に、益、を、言、を、嗟、ま、て、我、も、の、復、讐、
子、若、く、も、一、言、諸、君、を、希、也、ま、し、と、此、か、わ、り、
別、に、嗚、呼、諸、君、の、健、康、を、禱、す、







